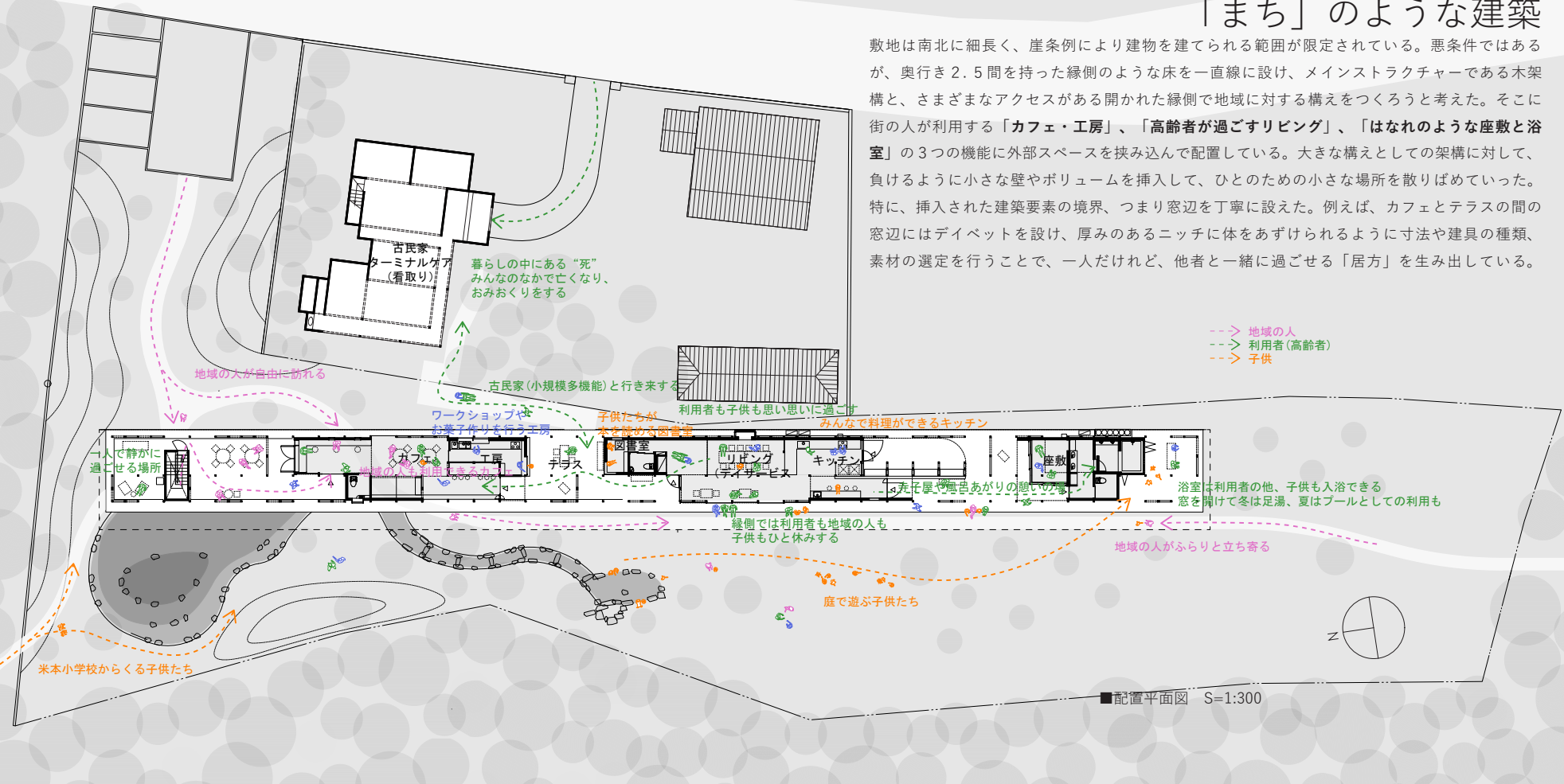


「まち」のような建築

敷地は南北に細長く、崖条例により建物を建てられる範囲が限定されている。悪条件ではあるが、奥行き2.5間を持った縁側のような床を一直線に設け、メインストラクチャーである木架構と、さまざまなアクセスがある開かれた縁側で地域に対する構えをつくろうと考えた。そこに街の人が利用する「カフェ・工房」、「高齢者が過ごすリビング」、「はなれのような座敷と浴室」の3つの機能に外部スペースを挟み込んで配置している。大きな構えとしての架構に対して、負けるように小さな壁やボリュームを挿入して、ひとのための小さな場所を散りばめていった。特に、挿入された建築要素の境界、つまり窓辺を丁寧に設えた。例えば、カフェとテラスの間の窓辺にはデイベットの設け、厚みのあるニッチに体をあずけられるように寸法や建具の種類、素材の選定を行うことで、一人だけれど、他者と一緒に過ごせる「居方」を生み出している。



■さまざまな居場所



デイベット



はなれ



浴室

